

クロード・レヴィ＝ストロースと音楽との関係について、とりわけ「相同性」に着目して考察しているのがジャン＝ジャック・ナティエの『レヴィ＝ストロースと音楽』（添田里子訳 2013 アルテスパブリッシング（Jean-Jacques Nattiez. 2008. *Levi-Strauss musicien: essai sur la tentation homologique*. Arles: Actes Sud.））であるが、レヴィ＝ストロースがいう「相同性」の意味を理解するのは難しい。というのも、他でもなく彼自身が、「対称、逆転、等価、相同、同形性……などの術語にわたしが与えている意味がルーズであることは、誰よりもわたしが自覚している」（早水洋太郎訳 2006 『神話論理 I 生のもものと火を通したもの』みすず書房、p.46（Claude Lévi-Strauss. 1964. *Mythologiques 1. Le Cru et le Cuit*. Paris: Librairie Plon.））と認めているからである。ただ、ごく単純に言えば、単なる要素同士の「類似性」ではなく、二項対立同士の「差異」（関係）の「類似性」のことを意味しているということができる。

本発表では、この相同性という発想に基づき、2009年に supercell が発表した1枚目のメジャー・デビューシングルの楽曲《君の知らない物語》を分析する。アニメ『化物語』（2009）のエンディングテーマとしても知られる楽曲であるが、とりわけ今回検討するのは、この作品の「物語的展開」である。楽曲の形式については様々な解釈が可能であるが、とりあえずは「イントロ（歌詞あり）」「Aメロ」「Bメロ」「サビ」「Aメロ」「Bメロ」「サビ」「Cメロ」「間奏」「Dメロ」「サビ」としておく。本発表ではCメロから間奏を経てDメロへと至る過程が、物語をどのように音によって表現しているかに注目する。特にCメロにおける歌詞（言語）と旋律（音）の関係、Dメロにおける四つの旋律と各歌詞内容との相同性に着目し、当該楽曲の描く物語が、音との相同性によって描かれていることを指摘する。そして、相同性に着目した楽曲分析の可能性について考察する。